第4章　小串構内医学部附属病院動物・ＲＩ実験棟新営に伴う試掘調査

1　調査の経過

小串構内の南西部、基礎第一研究棟と第二研究棟間の敷地に、建面積約500m²の規模をもつ動物・ＲＩ実験棟の新営が計画された。小串構内では近年の調査で、中央部周辺の埋蔵文化財の分布状況を知る成果が得られている。新営予定地の北東に位置する病棟、ＭＲＩ棟両敷地の調査で、二次加工のある剝片・使用痕のある剝片・剝片・敲石など、旧石器時代に属すると考えられる遺物が出土している[1)2)]。両敷地での調査結果からも、小串構内では中央部に近接するほど良好な遺物の出土状態を示しているとともに、遺物を包含する堆積層も数層に限定されていることが次第に明らかになりつつある。しかし、同層の分布範囲は必ずしも明確に把握できているとは言い難く、特に、今回の新営予定地のように調査のあまり及んでいない、南部から南西部にかけての地域では極めて不明瞭である。

新営計画の具体化を受けて、以上述べたような所見に基づき、埋蔵文化財資料館は埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、新営予定地内の埋蔵文化財の有無を確認するために試掘調査を実施した。トレンチは新営予定地内に存在する共同溝や消火栓等に伴う給水管など、既設の埋設物を回避して二ヶ所設定した。便宜上、東側の3.2m×3.7mのトレンチをＡトレンチ、西側の3.7m×7.5mのトレンチをＢトレンチと呼称した。Ａトレンチは当初、さらに北側に延長する予定であったが、構内造成等の埋め土を除去する際に埋設管が障害となったため延長を断念した。調査期間は平成２年11月19日から11月30日までで、調査面積は約40m²である。

なお、構内造成等に伴う埋め土は機械を使用して排除し、それ以下は手掘りによる分層発掘を行った。

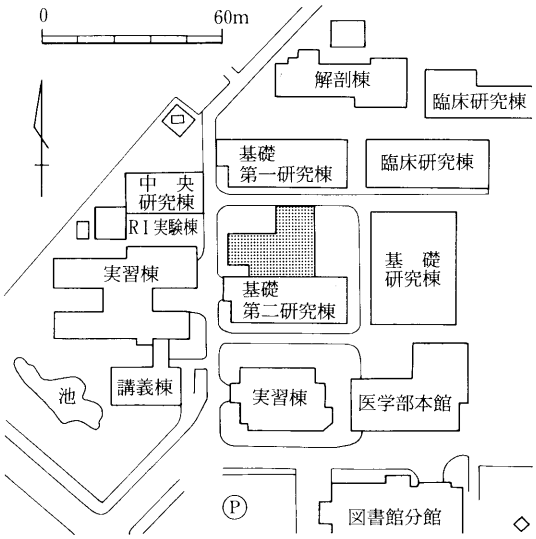

Fig. 40　調査区位置図

2　層位（Fig. 42，PL. 30(3)）

Ａトレンチ

現地表面から約240cm下位まで、構内造成等による埋め土が厚く客土されている。現地表面から約50cm掘り下げたところで、

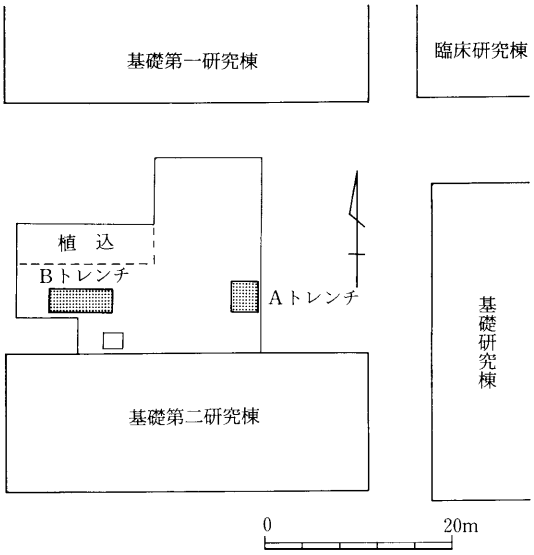

Fig. 41　トレンチ設定図

病棟敷地で検出された旧石器時代の遺物を包含する灰色砂層が検出された。層厚約60～70cmでトレンチ内全面に堆積する。旧耕作土等は認められず、埋め土の直下には第２層：緑灰色粘質土が堆積する。層厚は約20cmで、湧水が激しい。検出面の標高は約0.30m。その下には、植物遺体を若干含む第３層：青灰色粘質土が堆積する。約30cm掘削したが層位に変化はみられない。第２、３層とも遺物は出土していない。

Ｂトレンチ

Ａトレンチ同様、構内造成等による埋め土が層厚約200cmにわたって厚く客土されている。

また、現地表面から約60cm下位には、Ａトレンチでも認められた灰色砂層が最大約50cmの厚さでブロック状に堆積している。埋め土の下位には植物遺体を若干含む第３層：青灰色粘質土が堆積する。Ａトレンチでみられた第２層：緑灰色粘質土は堆積していない。検出面の標高は約0.75m。同層は完掘していないが、検出面から約30cm掘削した段階でも剝片１点が出土したにすぎない。

3　出土遺物（Fig. 43, PL. 30(4)）

盤状の縦長剝片で打面、打点を欠損する。腹面側がネガ面で、背面２面、腹面の剝離面の打撃は同一方向からなされ、ほぼ一定した打面を準備する石核から剝離されたものと考えられる。現存最大長23.5mm、現存最大幅22.0mm、現存最大厚6.0mm、重量2.56ｇ。蛇紋岩製。Ｂトレンチ第３層出土。

4　小結

今回の調査では、先に実施した病棟敷地の調査で確認された灰色砂層は良好な状態で検出できなかった。Ａ・Ｂ両トレンチとも構内造成等による埋め土内に混入していることから、小串構内のこれまでの調査の所見から、病棟敷地周辺からの造成による搬入土である可能性が高い。

Ａトレンチの東約40mで実施した基礎研究棟新営に伴う試掘調査では、第２層：緑灰色粘

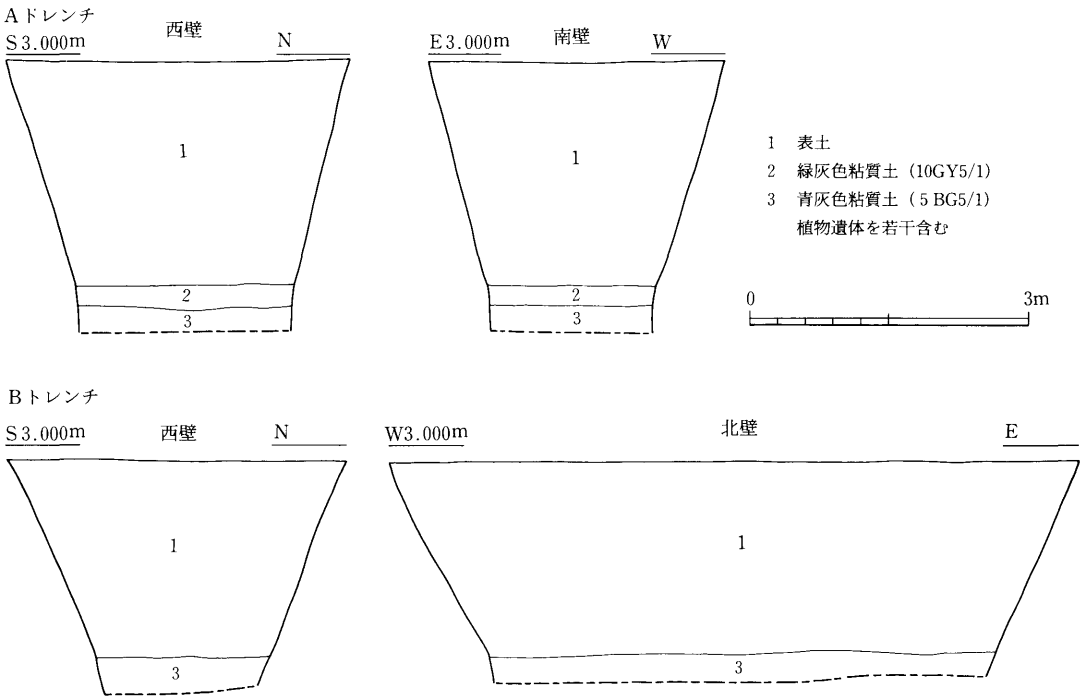

Fig. 42 土層断面図

質土が標高約－0.2m、第3層：青灰色粘質土が標高約－0.4mで検出されている。すなわち、埋め土以下の各堆積層は、Bトレンチから基礎研究棟に向かうにつれてその検出面がより低位に存在しており、西から東への旧地形の下降状況を示唆している。Bトレンチでの第2層の欠落は後世の削平によるものではないと考えられる。

出土遺物は、わずかにBトレンチ第3層から出土した、蛇紋岩製の剝片が1点あるにすぎない。小串構内ではこれまで積極的に縄文時代に属する石器として認定できる資料が皆無であること、病棟敷地やMRI棟敷地では二次加工のある剝片・使用痕のある剝片・剝片がナイフ形石器と同一層から出土していることなどから、今回出土した剝片も旧石器時代の所産と考えられる。剝片剝離技術や打面の形状については、出土点数、欠損資料であることなどから言及することは困難である。

なお、今回の調査地域の北東に位置する病棟敷地やMRI棟敷地では、同質の石材を用いた各種の石器が出土している。両敷地ではチャート、蛇紋岩、水晶、安山岩、玻璃質安山岩など、使用される石材は多様であるが、蛇紋岩の全石器中に占める割合は半数近くにのぼっている。今回の出土資料も、このような石材選択率の反映として理解できないであ

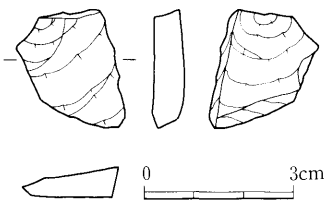

Fig. 43　出土遺物実測図

ろうか。

また、調査のもうひとつの成果は、遺物を包含する堆積層が小串構内の中央部から南西部にかけても分布していることが明かになったことである。周辺からの二次堆積層で、これまでの調査ではその色調、組成などから、その堆積地点によって数層存在していると考えられる。例えば、小串構内の東部に位置する体育館の敷地の調査で、青黄色粘質土からの出土が知られており、旧耕作土にも遺物を包含している[3)]ることもその傍証となるであろう。さらに、病棟敷地と体育館は直線にして約190mの距離があるが、その間の地域の調査では同時期の遺物は出土していない。小串構内全域にわたる調査は現在までのところ行われていないが、以上のことから現状では、小串構内での旧石器時代に属すると考えられる石器群は、北東部の体育館周辺地域と中央部に位置する病棟周辺地域から南西部にかけての、大きく二つの地域に堆積する土壌に包含されていると理解できる。詳細な分布範囲の把握が今後の課題であろう。

［注］

1）a　山口大学埋蔵文化財資料館「医学部附属病院病棟新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』、1988年）。

b　山口大学埋蔵文化財資料館「医学部附属病院病棟新営に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』、1989年）。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「医学部附属病院ＭＲＩ棟新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅸ』、1990年）。

3）山口大学埋蔵文化財資料館「宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

小串構内（医学部・同附属病院、医療短期大学部）全景（南西から）

PL. 30

小串構内医学部附属病院動物・RI実験棟新営に伴う試掘調査

(1) Aトレンチ全景（南から）

(2) Bトレンチ全景（南から）

(3) Bトレンチ北壁中央部土層断面（南から）

(4) 出土遺物　約1：1